

森林太郎・鷗外の著作物に頻出する“冤”（ただし、全著作物の中から漏れなく抜き出したものではない）

R7.10.14現在

No.	作 品 名	発表年月	出 典	文 言	備 考
1	舞姫	1890.1	『舞姫 中タ・セクスアリス』 森鷗外全集 1/ちくま文庫	この交際の疎きがために、彼人々はただ余を嘲り、余を嫉むのみならで、また余を猜疑することとなりぬ。これぞ余が 冤罪 を身に負ひて、暫時の間に無量の艱難を閲し尽す媒なりける。	
2	美術論場の争闘は未だ其勝敗を決せざる乎	1890.5	『鷗外全集 第二十二巻』 /岩波書店（昭和48年発行）	若し其見解は鷗外と殊なりといはば、何ぞ迅にこれを世に公にして、 冤 を雪ぎ蔑を防がざる。	
3	自評についての異議	1892.1	『鷗外全集 第二十三巻』 /岩波書店（昭和48年発行）	権に正太夫を獄卒とすれば、その荊鞭に觸る人の中には濫刑を受けたるものあるべく、また 冤罪 を負ひたるものあるべし。	
4	自評についての異議	1892.1	『鷗外全集 第二十三巻』 /岩波書店（昭和48年発行）	シルレル、ハウフが自評をば、後に漣山人こそ咎めつれ、いにしへより罪する人なきに、獨り三味道人のみおそろしき罪人のやうにおもひなさるは、豈 冤 にあらずや。	
5	傍観機関	1893.11.9	『鷗外全集 第三十巻』 /岩波書店（昭和49年発行）	寄居子は余が業績を挙げたるを以て自賛となせり。こは甚しき 冤 なり。余は我業績の言ふに足らざるを知る。	
6	独逸日記	※	『独逸日記 小倉日記』 森鷗外全集13/ちくま文庫	余は聊か仏教信者のために 冤 を雪ぎ、余が貴婦人方を尊敬することの、決して耶蘇教徒に劣らざるを証せんと欲するのみ。	※独逸日記は小倉時代(1899.6～1902.3)に清書された
7	独逸日記	※	『独逸日記 小倉日記』 森鷗外全集13/ちくま文庫	ワアルベルヒの曰く。諸君は森子に謝せざるべからず。森子は談笑の間能く故国のために 冤 を雪ぎ讐を報じたり。	※ 同上
8	脚気減少は果して麦を以て米に代へたるに因する乎	1901.8.17	『鷗外全集 第三十四巻』 /岩波書店（昭和49年発行）	予は故に徳義上諸専門雑誌の記者に望むに、此文を鈔録せずして、通篇之を轉載せんことを以てす。是れ錯誤と 冤枉 とを防がんが為めなり。	
9	即興詩人	1902.7	『即興詩人』 森鷗外全集10/ちくま文庫	予は既に、歳月の久しき、嗜好のしばしば変じ、文致の画一なり難きを憾み、また筆を擱くことの頻にして、興に乗じて揮瀉すること能はざるを惜みたりき。世あるひは予その職を曠しくして、縦に述作に耽ると謂ふ。 冤 もまた甚しきかな。	
10	中タ・セクスアリス	1909.7	『舞姫 中タ・セクスアリス』 森鷗外全集 1/ちくま文庫	その上お蝶が何だ。こっちは丸で女とも何とも思っていないのではないか。人を識らないのだ。 冤 もまた甚しいと思ったのである。	
11	金毘羅	1909.10	『舞姫 中タ・セクスアリス』 森鷗外全集 1/ちくま文庫	それは著述家である私立大学へ教えに行っている、収入の少ない博士の身にとって、余り非難すべきではないかも知れないが、兎に角吝だと云われるのは為方があるまい。ただその惜む金が溜まるのでないということを断って置いたら、博士に甚だしい 冤 を被せることにはならないだろう。	

12	棕鳥通信	1910.1.28	『森鷗外 棕鳥通信（上）』 /岩波文庫	ミュンヘンのLangenで出版した労働新聞記者Max Winterの小説 Der Fall Hofrichter は奥太利の毒入書状の疑獄を書いたものである。題名の士官の為に 冤 を雪ごうとしたものである。	
13	棕鳥通信	1910.7.7	『森鷗外 棕鳥通信（上）』 /岩波文庫	処刑の十五分前母と弁護士とにあてた遺書を作った。妓夫の汚名は 冤 であると書いてある。母への書には髪が添えてある。	
14	あそび	1910.8	『普請中 青年』 森鷗外全集 2 /ちくま文庫	木村が文芸欄を読んで不公平を感じるのが、自利的であって、毀られれば腹を立て、褒められれば喜ぶのだと云ったら、それは 冤罪 だろう。我が事、人の事と言わず、くだらない物が讃めてあったり、面白い物がけなしてあったりするのを見て、不公平を感じるのである。	
15	青年	1910.3 ～ 1911.8	『普請中 青年』 森鷗外全集 2 /ちくま文庫	ここまで考えると、純一の心の中には、例の女性に対する敵意が萌して来た。そしてあいつは己を不言の間に翻弄していると感じた。勿論この感じは的のあなたを射るようなもので、女性に多少の 冤屈 を負わせているかも知れないとは、同時に思っている。	
16	カズイスチカ	1911.2	『灰燼 かのように』 森鷗外全集 3 /ちくま文庫	作者が漫然と医者術語を用いて、これにCasuisticaと題するのは、花房の 冤枉 とする所かも知れない。	
17	心中	1911.8	『灰燼 かのように』 森鷗外全集 3 /ちくま文庫	女中達はお爺いさんを、蔭で助兵衛爺さんと呼んでいた。これはお爺いさんが為めにする所あって布団をまくるのだと思って附けた渾名である。そしてそれが全くの 冤罪 でもなかったらしい。	
18	棕鳥通信	1911.10.1	『森鷗外 棕鳥通信（中）』 /岩波文庫	ジョコンダの賊だと疑われた Baron de Schlichting はミュンヘンからフランス政府へ電報を打って 冤 を鳴らした。	
19	棕鳥通信	1911.10.1	『森鷗外 棕鳥通信（中）』 /岩波文庫	文士 Apollinaire の捕えられたのは、使っていた書記 Gery Pierret が盗んだスタチュエットを博物館へ返した為めである。返した時間が遅過ぎたと官辺では云っているが、輿論は 冤罪 だと云っている。	
20	棕鳥通信	1912.9.8	『森鷗外 棕鳥通信（下）』 /岩波文庫	Gilchristと云う婆あさんを殺して金剛石のプロオチを取ったと云うので死刑を宣告せられ、一等を減ぜられて三年このかた Aberdeenshire にいるドイツ人 Oskar Slater の 冤 を鳴らした小冊子を Conan Doyle が公にした。	
21	ながし	1913.1	『雁 阿部一族』 森鷗外全集 4 /ちくま文庫	詰まらぬ事になったものである。品行を好くしていると云う所に力瘤を入れて、 冤罪 に憤懣している自分の心を、父はなぜなんとも思ってくれぬだろう。	
22	棕鳥通信	1913.7.28	『森鷗外 棕鳥通信（下）』 /岩波文庫	この詩が守旧派の運動によって興行中止になったのに平ならざる諸団体は、それぞれ大会を開いて Hauptmann のために 冤 を雪いだ。	
23	水のあなたより	1914.2.5	『森鷗外 棕鳥通信（下）』 /岩波文庫	Dreyfus 大尉は 冤 を負っていて、真の罪人は Esterhazy だと看破して、当局のために Alger へ遣られた大佐ピカアルが、落馬して死んだ。	
24	栗山大膳	1914.9	『栗山大膳 洪江抽斎』 森鷗外全集 6 /ちくま文庫	なぜと云うに、逆意の有無を徳川氏に糾問せられる段になると、その讒誣を取てした利章と対決するより外に、 雪冤 の途はないのである。	

25	津下四郎左衛門	1915.4	『栗山大膳 渋江抽斎』 森鷗外全集 6 / ちくま文庫	この禍福とそれに伴う晦頭とがどうして生じたか。私はそれを推し窮めて父の 冤 を雪ぎたいのである。	
26	津下四郎左衛門	1915.4	『栗山大膳 渋江抽斎』 森鷗外全集 6 / ちくま文庫	しかしただ一つ言いたいのは、私が幼い時から、刑死した父の 冤 を雪ごうと思う熱烈な情に駆られて、専念に学問を研究することが出来なかったという事実である。	
27	津下四郎左衛門	1915.4	『栗山大膳 渋江抽斎』 森鷗外全集 6 / ちくま文庫	人はあるいは云うかも知れない。学問を勉強して、名を成し家を興すのが、即ち父の 冤 を雪ぐ所以ではないかというかも知れない。しかしそれは理屈である。	
28	津下四郎左衛門	1915.4	『栗山大膳 渋江抽斎』 森鷗外全集 6 / ちくま文庫	それからは私の執る職務が、器械的精神上労作に限られたので、私は父の 冤 を雪ぐと云うことに、全力を用いようとした。	
29	津下四郎左衛門	1915.4	『栗山大膳 渋江抽斎』 森鷗外全集 6 / ちくま文庫	顔に塗られた泥を洗うように、積極的に父の 冤 を雪ぎたいと云うのが、私の幼い時からの欲望である。	
30	津下四郎左衛門	1915.4	『栗山大膳 渋江抽斎』 森鷗外全集 6 / ちくま文庫	私はこの内面の争闘を闘った後に、暫くは惘然としていたが、思量の均衡がようやく恢復せられると共に、従来回抱していた 雪冤 の積極手段が、全く面目を改めて意識に上って来た。	
31	渋江抽斎	1916.1 ～ 1916.5	『栗山大膳 渋江抽斎』 森鷗外全集 6 / ちくま文庫	この 雪冤 の文を作った外崎さんが、わたくしの渋江氏の子孫を捜し出す媒をしたのだから、わたくしはただこれだけの事をここに記して置く。	
32	渋江抽斎	1916.1 ～ 1916.5	『栗山大膳 渋江抽斎』 森鷗外全集 6 / ちくま文庫	抽斎は老子を尊崇せむがために、先ずこれをジスクレジイに陥れた仙術を、道教の畛域外に逐うことを謀った。これは早く清の方維甸が嘉慶板の抱朴子に序して弁じた所である。さてこの 洗冤 を行った後にこう云っている。	
33	伊沢蘭軒	1916.6 ～ 1917.9	『伊沢蘭軒（上）』 森鷗外全集 7 / ちくま文庫	しかし此の如く古の蘭草のために 冤 を洗うことは、蘭軒校斎等に始まったのでは無い。	
34	鈴木藤吉郎	1917.9	『栗山大膳 渋江抽斎』 森鷗外全集 6 / ちくま文庫	越川氏の留むる所の書は題して「安政三組杯弁妄」と云う。これをわたくしに示すのは、世に公にして鈴木藤吉郎がために 冤 を雪がむと欲するのである。	
35	鈴木藤吉郎	1917.9	『栗山大膳 渋江抽斎』 森鷗外全集 6 / ちくま文庫	今鈴木がために 冤 を雪がむと欲するには、新に確拠ある鈴木伝記を草するに若くは無い。	
36	鈴木藤吉郎	1917.9	『栗山大膳 渋江抽斎』 森鷗外全集 6 / ちくま文庫	松林伯円は安政三組杯を作って藤吉郎の屍に鞭った。越川氏が起ってその 冤 の幾分を雪いだのは、実に多とすべきである。	